

塔婆について

今回は施餓鬼会の回向や、皆様の御仏壇の精霊棚にお祠りしてある塔婆について考えてみたいと思います。お盆に当山が使用している塔婆には、施餓鬼会で初盆の御回向に用いる板塔婆と一般の御回向に用いる水塔婆、そして、お墓参りの後、御先祖様を御家庭にお迎えする意味で、「先祖代々」と書いた経木塔婆の三種類があります。三種類と申しましても、形はまったく同じ形をしておりますので、それぞれ別の意味がある訳ではありません。また、法事のおりの塔婆も同様です。

塔婆は卒塔婆（そとぼ）の略称で、漢字で書く卒塔婆の字は、梵語のストウパーの音写として当てはめられたものです。ストウパーはもともと仏舍利や聖者の遺骨などを納め、金石、土木などで土饅頭の形を作ったものでした。のちにはその頂上や周囲にいろいろな装飾を施すようになりました。単に仏塔ともいいますが、形の同じものに支堤（しだい）、梵語のチャイティアがあり、舍利があるものを卒塔婆（ストウパー）、ないものを支堤（チャイティア）と区別していました。しかしいつのまにか現実には区別がつかなくなってしまうたようです。

実際、私が学生のころインド・パキスタン・アフガニスタンを旅行した時、イン

ドでもガンダーラ地方でもその区別はできませんでした。この仏塔が中国、日本の三重、五重の塔や、石の五輪塔、十三重の塔へと変形したのです。以前、浄土宗の訪中団の一員として中国各地で見た何重にも積み重ねた石塔は、インドのものとは似ても似つかないものでしたが、日本でもその小型のものが造られました。しかし日本は独自の木造建築の塔を生み出しました。そしてまた、日本では平安時代になつてから埋葬・年忌法要のために塔婆を立てて供養する風習が生まれました。鎌倉時代以降には板塔婆が考案され普及しました。そしてさらに経木塔婆も考え出され広く塔婆供養が行われるようになったのです。時代と国による大きな変化でした。

現在の塔婆の上部が五輪塔の形をしているのは、以上のようなストゥーパから日本の五重の塔への変遷と深い関係があるのです。そして、五輪塔の形は下から方・円・三角・半円・宝珠で、地水火風空の五大を表示しています。五大とは万物を構成する五大要素という意味です。つまり、この世界に存在するものを象徴し、「諸行無常」すべてのものはうつろいやすく、不変なものはない「諸法無我」永遠不変な自分はいない、ということをも表わしているのです。御回向の終わった塔婆をお墓に納めたり、川に流したり、清浄な火で燃やす時、塔婆は無言でこの真理を教えにくれているのです。